

近藤高史先生の授業見学に際しまして、中島恒雄総長先生より学生に向け講話がございました。専門学校を立ち上げたころ、保育士の資格を取得しても就職先が見つからず、不本意な職に就かざるを得ない学生が多かった。今日、保育士の間口が広がったが、安定的な保育士として職をつかむには「公務員保育士」がベストである。そのためには、公務員試験に合格しなければならない。担当の先生の指導をしっかり受け、是非公務員試験に合格してほしい、という学生へのメッセージが伝えられました。

今回の練習問題は、「一般知能／数的推理」問題2題であった。「1から100までの間のある整数を7で割ったときの余りは5で、13で割ったときの余りは9である。この整数を18で割ったときの余りはいくつか。」5択から答えを選ぶ問題であった。

保育児童学部の学生は、本学他学部の学生と比して、こうした問題は苦手である。落ち着いてじっくり考えることが不得意な学生が他学部の学生よりも多いと言えるだろう。中には、数的推理問題のヒントを指導されなくとも難なく問題を解く学生もいる。「できる」学生から「できない」学生まで幅広い層の集団と言える。問題の途中途中で、総長先生より、「分かったかどうか確認してください」「分かった人を当てて説明させてください。」「もう一人当てて説明させてください。」、今回の授業見学の要諦はこの点にある。すなわち、総長先生が繰り返し話をしたことは、「できない子をできるようにする」とは何か、「取りこぼすことは許されない」、その意味を私たちに問いかけているように思えてなりませんでした。

日本の学校教育は、戦後高度経済成長期を迎え、「知識重視」の教育に傾斜していきました。いわゆる「7・5・3」現象が生まれ、小学校で7割、中学校で5割、高等学校で3割の児童生徒しか学習内容を理解していない。そこから「落ちこぼれた」子どもたちは、或る者は校内暴力に走り、或る者は不登校となり「生徒指導上の問題児童生徒」として不当に扱われてきました。「エリート」になる特権を奪われ、人々の社会構造が階層化していきました。

中島恒雄総長先生のことばは、「どの子にも目を掛ける」重要性を、戦後の日本のヒエラルキー型の教育を問う質を持っていると思えてなりませんでした。